

水 稲（コシヒカリ）

夷隅農林振興センター

1 地区名

夷隅地区（ちば国吉米匠の会、JAいすみ もっと安心米生産班、個別生産者）

2 栽培戸数、栽培面積、収穫量又は出荷量、出荷先又は販売方法

組 織 名 等	栽培戸数	栽培面積	収 穫 量	出 荷 先
ちば国吉米匠の会（いすみ市）	22	57.9ha	480kg/10a	JAいすみ直販
JAいすみもっと安心米生産班	36	57.4ha	480kg/10a	JAいすみ
個別生産者	10	40.6ha	480kg/10a	直販
合 計	68	155.9ha		

3 ちばエコ基準達成状況

区 分	実施状況	ちばエコ基準
化学合成農薬(成分回数)	6回	7回
化学肥料（窒素分量）	1.8kg/10a	4.5kg/10a

4 事例のあらまし

夷隅地区は、良質の早場米産地として高い評価を得ています。平成17年の「ちばエコ農産物」水稻栽培は、約156ha行われました。2産地が指定を受け、個別生産者も認証を受けています。

いすみ市の「ちば国吉米匠の会」は、従来から減化学肥料栽培等に取り組んでいましたが、減化学肥料栽培の廃止を契機に「ちばエコ農業」に取り組み、さらに基準を設けてブランド米を生産しています。販売はJAを通じた米屋との契約販売等を行い、販売先のニーズに合わせた生産を行っています。

夷隅地区では他に、個人の認証、JAもっと安心米の取り組みも広がっています。

5 背景・動機

(1) 夷隅地区の水稻生産

夷隅地区の水稻作付け面積は3,450haで、品種構成はコシヒカリが80%を占めています。水田は粘土質が強く、苦土の含有量が多く、また、チッソ施用量は少ないことで、良質米として定評があり、JA等でブランド米としての販売がされています。

(2) 減化学肥料栽培から「ちばエコ米へ」

旧夷隅町では平成8年頃から減化学肥料の特別栽培米の取り組みを始め、生協へ

の販売をしていました（夷隅町減化学肥料栽培米研究会）。

また、酪農家が生産するBM液肥を施用したBM米の取り組みも始まりました。

しかし、国の「特別栽培農産物に係る表示ガイドライン」の改正で「減化学肥料栽培米」が廃止となり、「ちばエコ農業」が始まったことから、平成16年から「ちばエコ米」に組み込み、「ちばエコ農産物」産地指定を受けました（ちば夷隅町ふっくらエコ米研究会に改名）。初年の平成16年は30ha、17年は58haが作付けられました。研究から実践の段階となったことから平成17年9月「ちば国吉米匠の会」に改名しました。

(3) ブランド米生産の取り組み

「ちば国吉米匠の会」では、米屋で組織する「さわやか八起会」と連携し、①「ちばエコ農産物」認証取得、②BM液肥の使用、③1.85mm以上の網目で選別する基準で生産した米を、ブランド米「万喜」として販売しています。

(4) 直売でのイメージアップに活用

夷隅地区では農産物直売所等での米の直売も活発で、個別の農家では「ちばエコ農産物」認証を受けることで商品のイメージアップを図っています。



6 栽培方法

農薬・化学肥料削減の代替技術としては、生物農薬の種子消毒剤利用、有機質由来の肥料の使用と土づくり及び適切な管理に努めることで対応しています。

コシヒカリでの栽培例です。

(1) は 種

種子消毒は生物農薬のエコホープドライを使用しています。エコホープドライは処理時期に幅がありますが、は種前の処理で行うようにしています。

(2) 育 苗

は種は3月中旬で、床土の消毒を行わないため、発芽を一斉にさせる管理が重要となります。1箱当たりのは種量を乾籾で130g以下の薄播きにし、温度管理は30℃を超えないようにして健苗を育成します。

ア 栽培管理例

作業名	実施年月日
前作収穫終了	平成16年8月29日
耕起	平成16年9月2日
は種	平成17年3月17日
田植	平成17年4月17日
病虫害防除	平成17年7月16日
収穫開始	平成17年8月25日
収穫終了	平成17年8月25日

イ 使用資材

(ア) 土づくり・施肥等

(10 a 当たり)

使用銘柄 (N-P-K)	実施年月日	施用量	全 N	化学N
稲わら	平成16年9月2日	0.5 t		
BM液肥	平成17年4月1日	2 t		
有機アグレット673特号(6-7-3)	平成17年3月22日	40kg	2.4kg	0 kg
苦土過磷酸 (0-17-0)	平成17年6月5日	20kg		
みのり有機2号(15-3-10)	平成17年7月5日	15kg	2.3kg	1.8kg
合 計			4.7kg	1.8kg

(イ) 病虫害・雑草防除等

使用農薬	対象病虫害	実施年月日
※エコホープドライ	苗立枯細菌病、ほか苗病、もみ枯細菌病	平成17年3月15日
プリンス粒剤	イネドロオイムシ	平成17年4月17日
ミスターホームランLフロアブル	水田一年生雑草	平成17年4月29日
アミスタートレボンSE	いもち病、紋枯病、カメムシ類(空散)	平成17年7月16日
化学合成農薬使用回数6回 (総使用回数7回)		

※印は、「化学合成農薬に含めない農薬」

(3) 基肥

有機質チッソ100%の肥料を使用しています。肥料分の溶出が遅いため、化成より早めに施用します。施肥量は地力によって加減していますが、有機アグレットを20～40kg/10aとしています。

(4) 田植

移植適期に植えます。植付け株数は倒伏しにくいように60株/坪以下の疎植傾向となっています。

初期害虫防除は、プリンス粒剤を田植え時に箱施薬しています。

(5) 雑草防除

一発剤（3成分含有）の1回処理で行っています。

除草剤の効果を高めるために、田面の均平や処理後の水管理では10日間は水を切らさないように注意します。

(6) 水管理

1株莖数15~18本で中干しに入ります。また、溝切機を使い、十分に乾くようにします。倒伏に強く、病気が発生しないようなイネの姿にしていきます。

出穂35日前ころに中干しを終了し、間断かんがいに入り、田の表面が湿った状態を保つようにします。

落水は出穂後25日以降とし、籾を十分太らせるようにようにします。

(7) 穂肥

穂肥は出穂20~18日前（幼穂長1cm）にみのり有機2号を施用します。施用量は10~20kg/10aを稲の葉色の濃淡、莖数の多少で加減しています。穂肥は玄米タンパク含有量を考慮して、チッソは速効性の多いものを使用しています。

(8) 防除

航空防除ではアミスタートレボンSEが使われています。出穂後、カメムシ類が多い場合は個人防除を行います。

(9) 刈り取り乾燥調製

帯緑色籾歩合15%の適期刈り取りを行います。

(10) 土づくり

稲わらすき込みは稲刈り後早めに行います。苦土重焼燐等の土壌改良材、堆肥・BM液肥・米ぬか等有機資材による土づくりを積極的に行っています。

7 今後の展望等

(1) 生産

栽培計画の徹底と資材農薬の適正使用のため栽培講習会を実施しています。また、気象条件等に対応した管理を実施するため、ほ場巡回・現地検討会を開催するとともに生育・管理情報を発行しています。

ライスグレーダーの網目をより大きいものに変えるなど、一般栽培よりおいしいお米を供給することで評価を高めるようにしています。

(2) 流通・販売

「ちばエコ農産物」を有利に販売することが今後の生産促進に欠かせません。そこで消費者の目に触れる機会を多くするために、商品への認証シールの貼付や販売協力店の登録を推進しています。